メッセージアウトライン
サムエル記第一18:1～30

「ダビデとサウル」

[1-2]「ダビデがサウルと語り終えたとき、ヨナタンの心はダビデの心に結びついた。ヨナタンは、自分自身のようにダビデを愛した。サウルはその日、ダビデを召しかかえ、父の家に帰らせなかった」

ペリシテ人の最強の戦士、巨人ゴリヤテを倒し、イスラエルに勝利をもたらしたダビデに対して、サウル王の長男で本来なら自分が次の王になる存在のヨナタンはダビデを愛し、その神への信仰に打たれ、彼の心はダビデの心に結びついた。これは非常な親近感を覚えたということである。ヨナタンも14:6節で主への同じ信仰を告白し、ペリシテ人との戦いに挑んでいる。サウル王も普段は父エッサイの羊の世話のために家に帰らなければならないダビデを王宮に召しかかえ、彼の父の家に帰らせなかった。

[3-4]「ヨナタンは、自分自身のようにダビデを愛したので、ダビデと契約を結んだ。ヨナタンは着ていた上着を脱いで、それをダビデに与え、自分のよろいかぶと、さらに剣、弓、帯までも彼に与えた」

「契約」…この場合は、真の兄弟以上の関係を持つ者としての約束事をお互いに結ぶこと。もっとも、これはヨナタンの一方的な申し出から始まったことであろう。

ヨナタンは彼のすべての武具をダビデに与えたが、これは我が身を与えるのと等しい行為である。

[5]「ダビデは、サウルが遣わすところどこへでも出て行き、勝利を収めた。サウルは彼を戦士たちの長とした。このことは、すべての兵たちにも、サウルの家来たちにも喜ばれた」

ダビデはイスラエル軍の兵の一員として採用され、サウルがペリシテ人との戦いに遣わすどこへでも出て行き、戦いに勝利した。それでサウルは彼を戦士たちの長にした。年齢からすれば彼が一番若かったのかもしれないが、だれも反対する者はなく、すべての兵や王宮で仕えるサウルの家来たちにも喜ばれた。これはダビデの神への信仰と神の助けゆえの勝利であった。

[6-7]「皆が戻り、ダビデがあのペリシテ人を討ち取って帰って来たとき、女たちは、イスラエルのすべての町から、タンバリンや三弦の琴をもって、喜びつつ、歌い踊りながら出て来て、サウル王を迎えた。女たちは、笑いながら歌い交わした。『サウルは千を討ち、ダビデは万を討った。』」

「千、万」…文字通りの数ではなく、サウルとダビデを比較した表現。ゴリヤテは一万人に匹敵した。この歌は一度だけでなくその後も、ダビデがペリシテ人との数々

の戦いに勝って帰って来たときに、繰り返し歌われたのであろう。
[8-9]「サウルは、このことばを聞いて激しく怒り、不機嫌になって言った、『ダビデには万と言い、私には千と言う。あれにないのは王位だけだ。』その日以来、サウルはダビデに目をつけるようになった」
　サウルはダビデに対する民衆の人気をねたんだ。「あれにないのは王位だけだ」…サウルのダビデに対する疑惑の始まりである。
[10-11]「その翌日、わざわいをもたらす、神の霊がサウルに激しく下り、彼は家の中で狂いわめいた。ダビデはいつものように竪琴を手にして弾いたが、サウルの手には槍があった。サウルは槍を投げつけた。ダビデを壁に突き刺してやろうと思ったのである。ダビデはサウルの攻撃から二度も身をかわした」
　サウルはまた精神錯乱状態になり、狂いわめいた。この時はかなりひどい状態であった。ダビデは王の錯乱状態を静めるために、いつものように竪琴を持って弾いていたが、サウルは手にあった槍をダビデに投げつけた。彼はダビデが自分の王位を脅かす者と考え、殺そうとしたのである。しかし、ダビデは二度も身をかわした。彼は若く、身体能力も高かったのであろう。
[12]「サウルはダビデを恐れた。それは、主がダビデとともにおられ、サウルを離れ去られたからである」
　サウルは自分にではなく、ダビデに主がともにおられることを自覚した。そして今、サウルには主ご自身ではなく、主からの悪い霊が下るようになった。それゆえ、彼はダビデを恐れるようになったのである。
[13-14]「サウルはダビデを自分のもとから離し、彼を千人隊の長にした。ダビデは兵の先に立って行動した。主が彼とともにおられたので、ダビデは、行くところどこででも勝利を収めた」
　「千人隊の長」…千人の兵士を統率する長。ダビデはサウルの道具持ちから戦場で千人の兵士を率いて戦う隊長になった。名誉な地位であるが危険も大きかった。サウルはダビデを自分のもとから遠ざけ、戦死させようとしたのかもしれない。しかし、主がともにおられるダビデは率先して部下の先に立って戦い、行くところどこででも敵を打ち破り、勝利した。
[15]「彼が大勝利を収めるのを見て、サウルは彼を恐れた」
　「恐れた」は原語では12節のことばとは違うことばが使われており、恐るべき人物を回避する強い恐怖心を表している。ダビデに対するサウルの心理状態が病的に悪化してしていることが分かる。
[16]「イスラエルもユダも、皆がダビデを愛した。彼が彼らの先に立って行動したからである」
　ダビデはサウルの王宮から外に出ることによって逆に民からの広い愛を獲得するに至った。サウルのすることはすべて裏目に出ている。

[17-19]「サウルはダビデに言った。『これは、私の上の娘メラブだ。これをおまえの妻として与えよう。ただ、私のために勇敢にふるまい、主の戦いを戦ってくれ。』サウルは、自分の手を下さないで、ペリシテ人に手を下させよう、と思ったのである。ダビデはサウルに言った。『私は何者なのでしょう。私の家族、私の父の氏族もイスラエルでは何者なのでしょう。私が王の婿になるとは。』ところが、サウルの娘メラブをダビデに与えるというときになって、彼女はメホラ人のアデリエルに妻として与えられた」

ゴリヤテを倒した者に対するサウルの約束は彼の娘を与えるというものであった。→17:25

サウルは今、それを実行に移し、長女メラブをダビデに与えるという。しかし、これにより、さらに勇敢にふるまい主の戦いを戦ってくれと命じる。彼は自分の手ではなく、ペリシテ人の手によってダビデを戦死させようとしているのである。ダビデは王の婿になるという話に卑下する。ところが急にこの話は破談となる。この理由は不明であるがサウルはしばしば約束を破る。→サムエルの到着を待たずに全焼のいけにえを献げた。(13:8~9)、アマレク人を聖絶しなかった。→15章

メホラ人アデリエルの方がエッサイの家よりも裕福であったからかもしれない。「メホラ」とはヨルダン川中流の西数キロメートルのマナセ部族に属する「アベル・メホラ」のこと。

とにかく、サウルはダビデに妻を与えるのには本気ではなかったことが分かる。

[20-21]「サウルの娘ミカルはダビデを愛していた。そのことがサウルに告げられた。そのことは、サウルの目には良いことに思えた。サウルは『ミカルを彼にやろう。ミカルは彼にとって罠となり、ペリシテ人の手が彼に下るだろう』と思った。そして、サウルはもう一度ダビデに言った。『今日こそ、おまえは婿になるのだ。』」

サウルの下の娘ミカルがダビデを愛していることがサウルに告げられると、今度はサウルはミカルによってダビデを陥れようとする。しかし、ダビデはメラブのことで苦い思いをしているので、容易にサウルのことばを受け入れようとはしない。

[22]「サウルは家来たちに命じた。『ダビデにひそかにこう告げなさい。【ご覧ください。王はあなたが気に入り、家来たちもみな、あなたを愛しています。今、王の婿になってください。】』」

これはしり込みをしているダビデに対する、家来を使ってのだめ押しである。

[23-24]「サウルの家来たちは、このことばをダビデの耳に入れた。ダビデは言った。『王の婿になるのがたやすいことに見えるのか。私は貧しく、身分の低い者だ。』サウルの家来たちは、ダビデがこのように言っています、と言ってサウルに報告した」

ダビデにとって王の婿になることは身分の違いもあり、そう簡単なことではないと思っている。

[25]「サウルは言った。『ダビデにこう言うがよい。王は花嫁料を望んではいない。た

だ王の敵に復讐するため、ペリシテ人の陽の皮百だけを望んでいると。』サウルは、ダビデをペリシテ人の手で倒そうと考えていた」

ダビデのことばに対して、サウルは花嫁料の代わりにペリシテ人の陽の皮百を望んだ。ダビデをペリシテ人の手によって殺そうとしたのである。「陽の皮」とは割礼の時に切り取られる男子の生殖器の皮のこと。ペリシテ人は割礼を受けていない不浄の者とされていた。それを実現させるためにはペリシテ人を百人殺さなければならない。その途中でダビデはペリシテ人に殺されるであろうとサウルは考えたのである。

[26-27]「サウルの家来たちは、このことばをダビデに告げた。王の婿になることは、ダビデの目には良いことに思えた。そこで、期限が過ぎる前に、ダビデは立って、部下と出て行き、ペリシテ人二百人を討って、その陽の皮を持ち帰った。こうしてダビデは、王の婿になるために、約束を果たした。サウルは娘ミカルを妻としてダビデに与えた」

「期限が過ぎる前に」…ペリシテ人を討つべき期限はサウルによって定められていた。

サウルの提案は、ダビデにとってちょうど良いと思われた。それで彼は部下とともに出て行ってペリシテ人と戦い、何と約束の二倍のペリシテ人二百人分の陽の皮を持ち帰って来た。それでサウルの当ては外れ、サウルは娘ミカルをダビデに与えることになった。

[28-30]「サウルは、主がダビデとともにおられ、サウルの娘ミカルがダビデを愛していることを見、また知った。サウルは、ますますダビデを恐れた。サウルはずっと、ダビデの敵となった。ペリシテ人の首長たちが出陣してきたが、彼らが出て来るたびに、ダビデはサウルの家来たちのすべてにまさる戦果をあげ、彼の名は大いに尊ばれた」

主がともにおられるダビデ、主が去られたサウル。この違いは大きい。

ダビデは王子ヨナタンの盟友となり、ペリシテ人との戦いで連戦連勝し、すべての兵士たちからも喜ばれ、女たちから喜びの歌をもって迎えられ、イスラエルの民もユダの民もみな彼を愛した。

千人隊長にも抜擢され、王の婿ともなった。彼自身は意識していなかったであろうが、彼は着々とイスラエルの王座に近づいて行く。

それに比してサウルはダビデを王宮に召しかかえるが、主からの悪い霊により精神錯乱に陥り、ダビデを槍で殺そうとする。さらにはペリシテ人との戦いに送り出し、戦死させようとする。また上の娘メラブと結婚させようとするが、直前にその約束をひるがえす。次には下の娘ミカルを与えるために、花嫁料の代わりにペリシテ人の陽の皮百を求める。これもペリシテ人の手によってダビデを戦死させようとしたのである。しかし、彼の計画はすべてうまくいかず、かえってダビデのために益となった。

それゆえ、サウルはますますダビデを恐れ、敵対し、主のみこころにかなわない道に進んで行く。サウルはずっとダビデの敵となっていくのである。

最初は慎み深く謙遜で始まったサウルの王政はいつしか高慢となり、主なる神への不信仰、不従順となり、ついには王の位から退けられることを預言者サムエルによって宣告されるまでになった。そしてペリシテ人との戦いでイスラエルに救いをもたらしたダビデに対しては、いつまでも敵対する者となった。もし彼がうわべだけではなく、心から悔い改め、主に従う者となっていたならば、彼は主のみこころにかなった道を歩むこともできたであろう。主は悔い改める者には赦しと恵みを与えることのできるお方である。→詩51篇

私たちもここから教訓を学び、自己中心や不信仰、高慢に陥るのではなく、主がともにいてくださるダビデのように主への心からの信仰と謙遜な思いをもって歩んで行くことが大切である。主は信仰をもってより頼む者を決して捨て去られることはない。→申命記31:6,8、ヨハネ15:4~5